

1 活動名

アートを活用した障害者支援について先進地視察（榊愉快 studio COOCA 平塚市）

2 調査の目的

(1) 本市における課題

障害者支援は各種の取り組みをしているが、近年障害福祉サービスの就労継続支援 B 型事業所が増加している現状がある。当該事業は簡単な作業を行いながら継続的な就労につなげることを目的としているが、私の関わる就労継続支援事業が水耕栽培を行っているなど、多様な形態が来ている現状もあるが、障害者に対して単に単純作業による就労支援が本来の支援につながるか疑問を持っている。制度が目的としている就労につながっているのかの統計はないが、全国での取り組み状況及び実態との比較が必要である。

(2) 調査の必要性

本市において県外に事業主体のあるサービス事業者が本市に開設した B 型事業所において、就労者への虐待や不正請求があり、本市は指定効力の停止処分を行った。福祉サービス事業を利潤追求を目的とした事業にさせないためにも、障害者にとって必要な支援とは何かを考えるとともに、障害の違いにより支援手法も多様性が求められると考えるので、その現状を調査する必要がある。

(3) 調査項目

障害者支援：アートをサービス事業の作業として具体化した取り組み状況について

3 調査地選定理由

(1) 株式会社 愉快 studio COOCA（スタジオクーカ）平塚市

障害者福祉サービス事業としてのアート（絵画、陶芸等）を国の制度上の作業として認め、障害者のアートが事業として成立している事業所である。

4 調査結果

(1) 実施日 2023 年 2 月 1 日（水）

(2) 出席者 上條一正

(3) 障害者支援

- ・利用者は 20 名。100 名ほどいたが別事業所をつくり分離した。今後は重度障害者を対象とした支援に移行していく考え。利用者は東京から静岡まで広範囲。
- ・アート事業の対象障害者のほとんどは自閉症の方
- ・障害者への対応は 40 年前と比して社会的施設、設備等は変化しているが、障害者サービス事業は変化なく、作業効率性を上げることを求めている。相模原津久井やまゆり園殺傷事件を通じ、「生産性」と障害者との関係に対しこれまでも、現在も葛藤がある。
- ・作業性向上の視点から見て絵画（はじめはお絵かき）は作業ではなく余暇に楽しむものであり、単純作業による生産性を上げることが就労継続支援としては最重要であるとの認識を、実際に市場で売れることを通してサービス事業の対象として国も認めるようになった。
- ・就労者が自由に作業（作画等）をできる空間を提供し、職員が見守る対応を取ることで、個々の能力が発揮される。
- ・売れる方は納税義務が生じるほどの収入があり、事業所と折半にし、事業所分はその他の就労者に均等配分している。売れた者は励みとしているので金銭的に不

平はない。自己肯定感が生まれることで更にセンスが発揮される。

- ・ 売る手法は作品の見せ方で決まる。(置き方、飾り方、展示場所(良い画廊))
- ・ 福祉サービス事業所は国・県からの公的助成で運営が賄えていることから、支援事業が上手くいかななくても利用者さえいれば事業所にダメージはない。これは、何をやっても良いことにつながり、多様な事業形態に取り組めることになる。事業所が選択肢を多く持ち障害者に向き合えば障害者にとって有意義なものになる。

(4) 成果・所感等

障害者支援を始めて40年以上の経験と障害者に向き合う姿勢に感銘を受けた。

今回はアートを活用した事例を通して障害者サービス事業の在り方を視察したが、就労支援を単純作業に置き換え、作業効率性を上げることで就労機会を与え収入を増やそうとする視点だけではない多様な手法が必要であることを確認できた。アートを活用することも一つの手段であり、発達障害の方にとっては絵画等がその才能を発揮できる手段ともなり得る。作業現場で生き生きとした姿で作業に取り組む姿や出来上がった作品を見たときに、障害者の持つ可能性を実感するとともに、それを引き出すことこそが支援につながると感じた。

私の関わる水耕栽培を通じた就労支援は、農福連携というこれから求められる農業の姿の一部でもあることから、広がりはどうするかを共に考えていきたいと思う。

5 政務活動費

- (1) 使途項目 調査旅費
- (2) 支出額 15,620 円(日当 3,000 円、交通費 12,620 円)×1人

—以 上—